長田夏樹年譜

長田　礼子　編

1920（大正 9）年

6 月 11 日　長田正義（35）、章（29）夫妻の三男として、神奈川県鎌倉郡鎌倉町乱橋材木座 252 番地に生まれる。海軍主計少佐だった父正義は 3 月よりアメリカ出張中で不在だった。両親、祖母まさ（66）、長兄寅彦（6）、次兄武之（4）の六人家族。

1923（大正 12）年

9 月 1 日　中野の家で遭遇した関東大震災の思い出が最初の記憶である。

11 月 3 日　妹洋子（ひろこ）生まれる。

1927（昭和 2）年

4 月 1 日　長崎県佐世保市の光月小学校に入学する。

4 月 21 日　福岡県糟屋郡宇美町の宇美小学校に転校する。

1928（昭和 3）年

7 月 27 日　弟岩雄生まれる。

1929（昭和 4）年

12 月　広島県呉市の五番町小学校に転校する。

1930（昭和 5）年

4 月 16 日　祖母まさ亡くなる。享年 75 歳。

1933（昭和 8）年

3 月　五番町小学校を卒業する。

4 月　広島県立呉第二中学校に入学する。

9 月　結核性肋膜炎に罹患し、療養生活にはいる。

10 月　父正義が横須賀に転じ、横須賀の海軍病院に入院する。当時最新の外科手術を受けて、快方に向かう。

1934（昭和 9）年

4 月　神奈川県立湘南中学校に再入学する。

11 月　父が退官し、家族は東京都中野区上高田に転居。下宿生活をすることになる。この頃、加賀屋平三郎先生の影響で、記紀万葉に興味をもつ。

1936（昭和 11）年

4 月　下宿生活を解消し、家族とともに上高田に住むことになる。東京府立第二中学校へ転入する。絵画部に入部し、春陽会会員の倉田三郎先生から絵の指導を受ける。友

人は多かったが、特に東京外語スペイン語科に進学した黒髪繁雄氏は東外文芸班でも一緒で終生の友となる。また、この頃から上代日本文学関係の研究書に目を通すようになる。武田祐吉著『上代日本文学の研究』『上代日本文学史』、安藤正次著『日本文学史古代』、植木直一郎著『日本古典研究』、久米邦武著『大日本古代史』など。

1937（昭和 12）年

上代日本文学の研究には、上代日本語の研究・日本方言を研究する必要性を感じ、その方面の著作を読むようになる。山田孝雄著『奈良朝文法史』、安藤正次著『古代国語の研究』、伊波普猷著『古琉球』、柳田国男『蝸牛考』など。

1938（昭和 13）年

上代日本語研究のためにはアルタイ諸語を研究する必要性を感じ、満州語・蒙古語の独習をし、印欧比較言語学の諸著を読む。

1939（昭和 14）年

3 月　東京府立第二中学校を卒業する。

4 月　東京外国語学校蒙古語部に入学する。蒙古語・ロシア語・中国語を学習する。また、文芸班、剛健班（登山部）、ペガソ乗馬会に所属する。

9 月　東洋文庫で塞外民族歴史言語の研究を始める。オルホン突厥碑文、古代朝鮮語に関する諸著を読む。

1940（昭和 15）年

7 月　東京外語フランス文化会でフランス語の講習を受ける。また、東京外語ドイツ語会でドイツ語の講習を受ける。

8 月　この頃、外語蒙古語教授竹内幾之助先生の依頼で、「モンゴル語索引カード」作成の手伝いをする。

12 月　大日本回教協会主催の「アラビヤ語講習会」を神田駿河台にあった佐藤新興生活館で受講する。17 日に地下食堂で行われた懇親会に出席して、講師の菊池慧一郎先生と親しくなる。菊池先生に誘われて、田端にあるご自宅をたびたび訪問するようになる。菊池先生は京大でギリシア哲学を講じておられたこともあり、プラトンがご専門であった。語学マニアで、生活館ではアラビア語のほかサンスクリットも教えておられた。お聞きすると、英語・独語・仏語・ギリシア・ラテン・イタリア・スペイン・サンスクリット・アラビア・ペルシア・マレー・シリア・ヒンドスタニー・ウルドゥー・ヘブライ・ジャバ・蒙古・西蔵・満州・ビルマ・タイ・ロシア語に通じておられるということだった。折々のお話で、それが事実であることを知る。

1941（昭和 16）年

7 月　学徒至誠会台湾派遣学徒研究団の団員として、台湾に行く。

8 月　剛健班（登山部）・文芸班員で親友の神宮寿の妹とその友人たちと一緒に上高地に行く。のち、この神宮の妹マリと結婚することになる。

10 月　毎週、菊池慧一郎先生宅の家塾に通うようになる。ドイツ語を学び、ギリシア

語とラテン語の手ほどきをして頂く。

12 月　新進の言語学者服部四郎東大講師のところにアルタイ比較言語学について教えを請いに出向く。小林高四郎氏と論争中の服部先生から「小林高四郎氏に答ふ」という抜刷を頂く。また、上代日本語に関する研究を「上代日本語覚書」にまとめ、東京外国語学校校友会誌『炬火』33 号に発表する。

1942（昭和 17）年

9 月　東京外国語学校蒙古語部を卒業する。日本祖語がアルタイ語族に属することを証明すべく書いた「上代日本語とアルタイ語族」を『炬火』34 号に載せる。

9 月　華北交通株式会社に入社する。

10 月 1 日　本籍地長野県の松本連隊に入営する。しかし、雨中の訓練により肋膜炎が再発し即日帰京となる。

10 月　内原訓練所で華北交通の研修を受ける。

11 月　同期入社の社員と一緒に北京に向かう。神戸から大連まで連絡船、満鉄の汽車で奉天経由北京へ。27 日、零下 20 度の張家口に着任。加来健太郎氏ら 4 名と一緒。華北交通の青年隊舎に落ち着く。暖房は効いているが、机もなく、勉学の環境は皆無。張家口駅では、切符切り、集札、旅客案内と一通り旅客業務をおこなう。

1943（昭和 18）年

3 月　北京の中央鉄路学院（華北交通幹部養成学校）で車掌講習を受ける。講習の合間に、北京を見物してまわり、同僚の石本春久氏に伴われて石本氏の親戚に当たる原三七氏を訪ねて北京大学にも出向く。また、書肆にて蒙古語・満州語の文献を蒐集する。

4 月　肋膜炎が再発し、華北交通北京鉄路医院に入院する。一向によくならず、内地に戻って療養することになる。帰京し、多摩川保養園に入院する。

8 月　多摩川保養園を退院し、汽車で下関、船で釜山に渡り張家口に戻る。病後ということで、張家口駅の庶務に就く。

9 月　昭和 18 年度専門学校・大学卒業新入社員の勤務配属に関する本社試験を受ける。同期入社で北京在住の役山卓氏の家に厄介になる。9 日から太原、開封、連雲、徐州、南京、上海、杭州、蘇州と視察旅行を行う。太原では白石の叔父（父の妹の夫）に会い、上海の摩天楼に度肝を抜かれる。

10 月 1 日　総務局調査課勤務となる。北京の本社で市場リサーチ的な仕事をおこなう。北京の胡同に住み、中国人宅に中国語を習いに行くなど、学問的な環境が整う。

1944（昭和 19）年

2 月　『炬火』発表の 2 論文をまとめ、「上代日本語とアルタイ語族」として善隣協会発行の雑誌『蒙古』に掲載。この論文を読んだ江実氏より蒙古文化研究所に誘われる。

3 月　高倉克己氏より令弟正三氏の蘇州語に関する著書をいただき、中国語方言研究のため蘇州語を学び始める。

4 月　蒙古連合自治政府より宇佐美華北交通総裁宛に蒙古文化研究所要員として割愛

の依頼書が来る。このため、華北交通を退社する。

5月1日　蒙古連合自治政府調査官となり、張家口にあった蒙古文化研究所に勤務する。蒙文・満文・中国文の蒙古史関係書の翻訳をし、「蒙古歴史文典」を書き始める。ここから、『アルタイ語比較文典』を完成させることを企図する。なお、張家口には西北文化研究所があり、研究員の甲田和衛氏や蒙疆学院の山崎忠氏とは生涯の友人となる。

8月13日　肋膜炎が再発し、張家口の同仁会病院に入院する。

12月4日　同仁会病院を退院する。

1945（昭和20）年

3月　蒙古連合自治政府の錫林郭勒盟公署民生処文教股長となる。

6月　蒙疆錫林郭勒盟西ホチト旗に金代女真文字碑文、察哈爾省徳代北方にウイグル文字による蒙古語碑文を発見する。

8 月　敗戦により、張家口から北京に逃れる。「蒙古歴史文典草稿」「女真語覚書」「上代日本語文典草稿」「塞外民族史覚書」等の原稿を錫林郭勒盟に残す。北京では道教研究者の吉岡義豊氏宅に滞在する。学問を続けるため、中国残留を決意する。

9月　規律整然と噂に聞く八路軍に興味を持ち、解放区を目指して南下。山東省楽陵で八路軍に拘束され、恵民に護送の上収監される。日本軍投降者と共に行動することになり、通訳を依頼される。

12月頃　恵民から臨沂へ向けて出発する。

1946（昭和21）年

1月　蒙陰において元旦を迎える。沂河沿いに南下し臨沂に到着する。しばらく臨沂に滞在する。

2月頃　東北方面に向かうことになり、山東半島竜口より乗船して、黄海を横断し丹東へ。学問を続ける意志がかないそうもなくなり、八路軍を離れ単独行動をすることになる。

6月頃　遼陽で国民党支配地の監獄に収監される。日本人であることをあかし、植物学者の佐藤潤平氏に助けられる。当時、佐藤氏は日本人居留民の世話役をしていた。佐藤氏とは初対面であったが、松崎鶴雄氏の知人であった。

9月　内地に引き揚げる。上高田の自宅は焼け残っていた。しかし、両親・長兄一家・妹・末弟の 7 人が住み、他へ間貸しもしていた。それで、甲子園に住む次兄の家に居候し、大阪のモーターなどを売る多田興業商会に勤めた。しかし、商売になじまず帰京し、自宅の近くに間借りする。同じく求職に苦労する華北交通同期入社の友人たちと交流を深める。この同期仲間は「一八（いちはち）会」を結成していた。本郷に住む石本春久氏宅に刈谷辰男氏、細島芳雄氏、安富隼平氏などがよく集まった。東京外語時代の親友神宮寿宅を訪ねて、その妹神宮マリと再会する。

1947（昭和22）年

1月　小石川柳町にある中日書房に勤務し、雑誌『燈塔』の編集に携わる。

1 月　石田幹之助氏宅を訪問し女真語について教えを請う。

2 月　雑誌の執筆依頼に伊藤整、宮本百合子を訪ねる。

2 月　この頃、東大の倉石武四郎教授の研究室に出入りする。

5 月 11 日　神宮マリと結婚し、東京都中野区上高田に新居を構える。

5 月 26 日　神奈川師範学校に文部事務官として勤務する。

9 月　工藤篁氏や太田辰夫氏らと中文学会の発起人会を開く。

10 月 19 日　新夫人お披露目をかねて、長田宅で東京一八会を開く。

10 月 26 日　中文学会の発会式が湯島聖堂内の斯文会講堂で開かれる。

11 月 9 日　一八会の川谷幸男氏が太原より帰国し、石本氏宅で歓迎会。

1948（昭和 23）年

3 月 17 日　長男直樹生まれる。

4 月　神戸市立外事専門学校助教授（中国語担当）となる。

5 月　妻マリが長男直樹を伴い神戸に到着する。須磨区禅昌寺にある神戸市の寮に親子三人が住む。

5 月　中国語学研究会（於東京大）で、「中国音韻史の諸問題」と題して研究発表する。

6 月　中国語学研究会（於京都大）で、「上代中国語における語頭重子音について」と題して研究発表する。この時、いろいろと質問する佐藤長氏に対して「小うるさいことを言うな！テメエが北京でなにしてたか、ばらすぞ」と一喝して黙らせた挿話は有名。亡くなる少し前には、「佐藤長たちとバカ話しながら、飲んだのが一番楽しい酒席だった」と述懐する。

7 月　中文学会（於東京湯島聖堂）で、「シナチベット語族比較言語学の可能性」と題して研究発表する。

7 月　中国文化研究会（於神戸外専）で、「殷墟出土の亀甲獣骨文字について」と題して研究発表する。

12 月　日本エスペラント学会（於大阪 Y.M.C.A.）で、「蒙古語とエスペラント」と題して研究発表する。

1949（昭和 24）年

5 月　神戸言語学会を岸本通夫氏とともに創設し、第 1 回研究会（於神戸外専）で、「満州語と女真語」と題して研究発表する。

9 月　大阪言語学会（於大阪外大）で、「トルコ・モンゴル比較言語学方法論について」と題して研究発表する。大阪言語学会の創立者である石濱純太郎先生の恩顧を得て、女真語や契丹語の研究に本格的に取り組み始める。

10 月　大阪言語学会（於大阪外大）で、「原始日本語の音韻とアクセントに就いて」と題して研究発表する。

10 月　日本中国学会大会（於学士院）で、「女真文字の構造とその音価について」と題して研究発表する。

1950（昭和 25）年

2 月　中国文化研究会（於神戸外専）で、「墨子とその学説」と題して研究発表する。

2 月　中国文化研究会（於京大人文科学研究所）で、「古代中国語研究瑣説」と題して研究発表する。

3 月 17 日　父正義死去する。享年 65 歳。

7 月　神戸市立外事専門学校教授（中国語担当）となる。

7 月　ウラルアルタイ学会（於大阪外大）で、「女真文字金石資料とその解読について」と題して研究発表する。

8 月　神戸市垂水区東垂水町王居殿に建った市営住宅に転居する。

11 月　中国語学全国大会（於京大人文科学研究所）で、「北京語のローマ字表記法について」と題して研究発表する。

1951（昭和 26）年

1 月　神戸市外国語大学助教授（中国語・中国語学特殊講義担当）となる。

2 月 27 日　長女礼子生まれる。

4 月　神戸外大呉語研究班が坂本一郎教授・太田辰夫助教授に京大から吉川幸次郎教授・小川環樹教授が加わって結成される。この研究班に参加し、呉語史および近世日本語における呉語系借用語の研究を担当する。

4 月　大阪言語学会（於大阪外大）で、「ラムステッド氏追悼講演会」が開催され、「アルタイ比較言語学創始者の一人としてのラムステッド博士の業績について」と題して研究発表する。

7 月　ウラルアルタイ学会（於大阪外大）で、「契丹文字解読の可能性」と題して研究発表する。

9 月　中国語学研究会（於神戸外大）で、「呉語資料解説」と題して研究発表する。

10 月　朝鮮学会大会（於天理大学）で、「日鮮祖語に於ける母音の音価について」と題して研究発表する。

1952（昭和 27）年

2 月　賀登崧（グロータース豊岡市天主堂神父）の「華北民間宗教」と題した中国語の講演を聞く。

4 月　昭和 27 年度講義：2 年は『今古奇観』をテキストに北京官話を講義。中国語学特殊講義は元明代の中国語資料として『元朝秘史』明訳を講読。

10 月　京大の田村実造氏と小林行雄氏に呼ばれ、天理大の山崎忠氏と一緒に慶陵出土の契丹文字を記載した表を作成する。

11 月　中国語学全国大会（於天理大学）で、「蘇州語音韻体系の諸特徴について」と題して研究発表する。

1953（昭和 28）年

1 月　中国語学関西例会（於大阪外大）で、「北京語の文語音と口語音について」と題

して研究発表する。

4 月　昭和 28 年度講義：2 年は前年と同じ。4 年古文は『古文選』をテキストに講義。中国語学特殊講義は唐五代の中国語を『遊仙窟』や唐詩、敦煌出土の変文、禅籍を比較しながら講義。

1954（昭和 29）年

1 月　ウラルアルタイ学会（於大阪外大）で、「蒙古月名攷―至元訳語の月名を中心として」と題して研究発表する。

1 月　中国語学研究会例会（於大阪外大）で、「遊仙窟について」と題して研究発表する。

4 月　昭和 29 年度講義：2 年は呂叔湘の『語法学習』をテキストに教授。4 年は『史記文粋』をテキストに講義。中国語学特殊講義は王力の『中国語文講話』をテキストに講義。

11 月 22 日　次男俊樹生まれる。

1955（昭和 30）年

4 月　昭和 30 年度講義：2 年は文法と書写法を教授。4 年は魯迅の『且介亭雑録』をテキストに近代白話を講義。中国語学特殊講義は『宣和遺事』をテキストに擬古文的表現と口語的記述について講義。

1956（昭和 31）年

2 月 14 日　第 1 回「王居殿講孟塾」を長田宅で開く。月に 1 回開かれ、三沢玲爾氏、寺内邦夫氏、加納昭代氏などが参加する。

11 月　日本人類学会・日本民族学協会連合大会（於天理大学）に出席する。

1957（昭和 32）年

4 月　昭和 32 年度講義：2 年は文法を教授。3 年の講読は顧廷竜・王煦華選註『漢書選』。中国文学史は林庚『中国文学簡史　上巻』を参考書に上古文学から中古文学を講義。中国語学特殊講義は羅常培『漢語音韻学導論』をテキストに中国音韻学方法論を講義。

1958（昭和 33）年

1 月　この頃から、正月 3 日に神戸外大卒業生による新年宴会が開催されることになる。死の前年まで、ほぼ、この新年会は毎年続いた。

6 月　ウラルアルタイ学会（於大阪外大）で、「原始アルタイ語の母音体系について」と題して研究発表する。

1959（昭和 34）年

4 月　昭和 34 年度講義：中国文学史は前年度の続きで、隋唐五代と近世文学。中国語学特殊講義は文字論・音韻論・意義論を言語学的に講義。

6 月 21 日　第 1 回「墨子輪講読研究会」を尾嵜昇氏世話役により長田宅で開く。この後、月に 1 回開かれ、三沢玲爾氏、末延保雄氏、香山寿幸氏、尾崎実氏、松井真優子氏、藤岡ミサオ氏などが参加する。

10 月　日本言語学会（於神戸外大）で、「日鮮共通基語音韻体系比定のための二三の仮説」と題して研究発表する。

1960（昭和 35）年

4 月　昭和 35 年度講義：2 年講読は呉趼人『痛史』。

7 月　ジルニー・テキストに関する打ち合わせで、岩村忍氏に呼ばれたびたび京都に出向く。

1961（昭和 36）年

4 月　昭和 36 年度講義：3 年講読は羅根沢編『先秦散文選註』。中国語学特殊講義は王力『漢語史稿』上冊をテキストに北京語音の変遷と現代諸方言の分化過程の解明を中心に中国語音韻史を講義。

1962（昭和 37）年

4 月　神戸外大教職員組合の委員長となる。

4 月　「墨子輪講読研究会」は会員諸氏多忙のため、15 日に第 24 回を開催して終わる。

4 月　昭和 37 年度講義：2 年講読は毛沢東『矛盾論』。3 年講読は羅貫中『平妖伝』。4 年講読は胡雲翼『唐詩研究』を参考書にして唐詩を読む。中国語学特殊講義は『秦併六国平話』をテキストに元至治刊本全相平話の一つを選んで講読し、その文法的性格の解明を中心に文学的位置も併せ講義。

12 月　蔵中進氏らと設立した「水門の会」の第 1 回例会が持たれ、「卑弥呼訓読日向考」と題して話をする。

1963（昭和 38）年

4 月　昭和 38 年度講義：2 年は文法。3 年講読は静観子『六月霜』。中国文学史は上古から近世。中国語学特殊講義は「遊仙窟と伍子胥変文の語法と演変」。

7 月　水門の会の会誌『水門―言葉と歴史』創刊号が発刊する。

1964（昭和 39）年

4 月　昭和 39 年度講義：2 年文法は北京大学編『現代漢語』で教授。

6 月　朝鮮学会（於大阪市立博物館）で、「日朝両語親族語彙対応、不対応の問題―アルタイ比較民族言語学の立場から」と題して研究発表。

10 月　神戸市外国語大学教授（中国文学史・研究指導担当）となる。

11 月　中国語学研究会（於天理大学）に出席する。

1965（昭和 40）年

4 月　昭和 40 年度講義：2 年の文法。4 年の講読。言語学と朝鮮語を教授。

7 月　若手アルタイ学・中央アジア研究者集会（クリルタイ）の第 1 回集会が野尻湖畔で開催され参加する。

1966（昭和 41）年

4 月　昭和 41 年度講義：中国語教育法は「日本における中国語教育小史・中国における外国宣教師の中国語研究小史」など。長田ゼミは『全相平語』か「三言二拍」より

題目選択。

5 月　神戸外大生活協同組合が設立され、理事長になる。なお、水光熱費の負担をめぐる生協闘争が全共闘運動に結びつくことになる。

1967（昭和 42）年

4 月　昭和 42 年度講義：3 年講読は『五四小説選講』。中国語学特殊講義は「禅籍・変文を中心として唐代語法の特性を概観」する。長田ゼミは昨年度の継続。

4 月　神戸市外国語大学大学院教授兼任（中国語学研究・文化比較研究担当）となる。

1968（昭和 43）年

3 月　福井大学教育学部に集中講義に行く。

4 月　昭和 43 年度講義：2 年講読は『音序排列・新華辞典』。その前提として中国語の音韻体系について講義。3 年講読は『老残遊記』。中国語学特殊講義は『宋六十名家詞』『董西廂』『元朝秘史』の中から数編を講読し宋・金・元代の言語について講義。長田ゼミは宋元の講史小説から各自題目を選ぶ。大学院の中国語学研究は「文字論・音韻論・意義論」を講義。

10 月　関西大学兼任講師（中国語担当）となる（1976 年 3 月まで）。

11 月　京大内陸アジア研究所において、「アルタイ比較言語学上の問題点―語彙論」と題して講演する。

12 月　学生側と教授会の対立が深刻化し、学生側の意見を聞くべきであるという立場から教授会の少数派となる。

1969（昭和 44）年

4 月　昭和 44 年度講義：2 年講読は『林家鋪子』。4 年講読は『新編唐詩三百首』。中国語学特殊講義は『中国語学新辞典』を使用して音韻を講義。長田ゼミは昨年度の継続。大学院は中国語学演習で語法史または音韻史の論文を読む。文化比較研究は「世界の文字」を講義。

4 月　全共闘側が大衆団交を要求するが、教授会は応じず、封鎖占拠に到る。

4 月　6 名の同僚とともに教授会を批判し、「造反教官」となる。

6 月 10 日　「教授会の大衆団交受け入れ・学生の自主的封鎖解除」を要求して無期限ハンストを行うも、ドクターストップがかかり約 50 時間で打ち切る。

7 月 13 日　神戸外大に機動隊が導入され、強制的に封鎖解除される。

1970（昭和 45）年

4 月　教授会に復帰する。

5 月　授業を始める。2 年講読・3 年講読・中国語学特殊講義・ゼミ・大学院を担当する。

1971（昭和 46）年

4 月　昭和 46 年度講義：3 年講読は『六朝志怪小説』。中国文学史は韻文学史。中国語学特殊講義は音韻。長田ゼミは昨年度の継続。大学院の中国語学演習は「顔氏家訓書

証篇音辞篇」演習。

11 月　弟岩雄死去する。享年 43 歳。

11 月　アジア・アフリカ人民連帯大阪府本部の主宰で、府立労働会館において、「最近の情勢と中国語学習について」と題して講演する。

1972（昭和 47）年

4 月　昭和 47 年度講義：2 年講読は前期が中国語概説を講義し、後期が『注音魯迅作品選門外文談』を講読。3 年講読は前期が『儒林外史』「五河県」から語学的文学的背景を講義し、後期が『三国演義』「三顧茅盧」から演変とその影響を講義。長田ゼミは清末から五四時期までの文学作品・政治評論の研究を各自行う。中国語教育法は「倭の五王から江戸期までの中国語教育小史など」を講義。

4 月　兵庫県立神戸商科大学兼任講師（中国語担当）となる（1977 年 3 月まで）。

10 月　神戸外大市民講座で、「中国少数民族と周辺民族の言語と文化」と題して講演する。

1973（昭和 48）年

4 月　昭和 48 年度講義：2 年講読は王力『漢語音韻』。3 年講読は中国現代小説。中国文学史は大修館書店『中国文化叢書⑤・文学史』をテキストに講義。中国語学特殊講義は『遊仙窟』・『祖堂集』等から唐代口頭語の語法成分と特性を講義。長田ゼミは清末民初文学思想資料集から各自テーマを選ぶ。大学院は文化比較研究「文学言語とその文化圏」を講義。

10 月　朝鮮学会（於天理大学）で、「日朝農耕関係語彙の比較―日朝共通基語比定のため」と題して研究発表する。

10 月　日本言語学会（於上智大学）で、「日朝共通基語比定のための“対応”型の選択について」と題して研究発表する。

11 月　「東アジアの古代文化を考える会」第 5 回「謎の四世紀」で、「倭人の言語とその展開」と題して講演し、シンポジウムにも参加する。

1974（昭和 49）年

4 月　昭和 49 年度講義：2 年講読は『語文基礎知識』。3 年講読は郭先紅『征途』。中国語学特殊講義は『中国文化叢書①・言語』をテキストに講義。長田ゼミは前年度の継続。大学院は音韻論。

6 月　「東アジアの古代文化を考える会」第 9 回「古代日本語と朝鮮語」で、「朝鮮語の北方的要素」と題して講演し、シンポジウムにも参加する。

9 月　中国語学研究会（於大阪経済大学）に出席する。

1975（昭和 50）年

1 月　2 泊 3 日の香港マカオ観光旅行。

4 月　昭和 50 年度講義：2 年講読は中国語学概説と講読。3 年講読は現代文学。中国語学特殊講義は革命現代京劇様板戯の唱と白の語法的修辞学的研究を講義。長田ゼミは

「早期白話小説の語史的文学史的研究」をテーマに各自行う。大学院は中近世漢語音韻の研究。

4 月　大阪倶楽部午餐会で、「古代日本語をさぐる」と題して講演する。

4-5 月　日中友好の翼･兵庫県各界友好訪中団の一員として､上海→北京→天津を廻る。宴席で火を噴く大道芸をしようとして、伊藤道治神戸大教授に止められる。

6 月　日本言語学会委員会（於阪急甲東園駅前椿荘）に出席する。

6 月　日本言語学会（於関西学院大学）に出席する。

1976（昭和 51）年

4 月　昭和 51 年度講義：2 年講読は中国語学概説と講読。3 年講読は現代文学。中国語学特殊講義は『中国文化叢書①・言語』をテキストに講義。長田ゼミは前年度の継続。大学院は修士論文のテーマを中心に指導。

4 月　神戸外大外国学研究所東北アジア研究班の研究活動として、蔵中進氏らと『聖徳太子伝暦』の輪読会を月 1〜2 回土曜日に持つことになる。この会は日中文化交流史研究会に発展する。

6 月　9 年間休会していた「水門の会」再出発の会合が持たれる。その折に、「東雅臆度余録―「美し」と「麗し」・日朝風位比較小考」と題して話をする。

7 月　クリルタイ（於野尻湖ホテル）に出席する。

11 月　中国語学研究会（於龍谷大学）に出席する。

1977（昭和 52）年

4 月　昭和 52 年度講義：2 年講読は中国語学概説と魯迅『門外文談』を講読。3 年講読は『儒林外史』。中国語学特殊講義は『宣和遺事』の講読。長田ゼミは明清演義小説を輪読し、その語法を研究する。大学院は宋・元・明話本の語学的研究。

7 月　クリルタイ（於野尻湖ホテル）に参加する。

8 月　毛沢東思想学院創立 10 周年記念活動協力の呼びかけ人となる。

1978（昭和 53）年

4 月　昭和 53 年度講義：2 年講読は中国語学概説と唐作藩『漢語音韻学常識』。3 年講読は『快心篇』。長田ゼミは前年度の継続。大学院は中国近世音韻史研究と文化比較研究として楔形文字・ヒエログリフ・突厥文字の解読とそれにより解明した文化圏について講義。

4 月　大阪外国語大学大学院兼任講師（言語学特殊研究担当）となる（1980 年まで）。言語学特殊研究「日本語の比較言語学的研究」と題して日本語系統論を講義する。

1979（昭和 54）年

2 月　日中友好学術文化訪中団によるシルクロード旅行に参加する。ウルムチ→トルファン→蘭州→西安と廻る。西安では唐太宗の昭陵・始皇帝陵を見学する。

3 月　糖尿病のため川崎病院に生活改善を目的とする教育入院をする。

4 月　昭和 54 年度講義：3 年講読は『快心篇』。4 年講読は『六朝志怪小説』。中国語学

特殊講義は変文・禅家語録などから唐代俗語について考察。長田ゼミは唐詩輪読と語学的文学的研究。大学院は『韻略易通』『韻略滙通』『五方元音』をテキストに中世から近代にかけての中国語音の変遷について考察。

4 月　大阪外大大学院では「文字言語学研究導論」として、世界の文字について講義する。

4 月　「水門の会」例会で、「吐魯番・西安を訪ねて」と題して話をする。

10 月　神戸外大市民講座で、「日本語系統論について」と題して講演する。

1980（昭和 55）年

1 月　’80 日韓共同古代史シンポジウム（東京会場）に参加する。

4 月　昭和 55 年度講義：2 年講読は中国語学概説と王力『漢語音韻』。3 年講読は『説唐』。中国文学史は陸侃・馮沅君『中国文学史簡編』をテキストに講義。長田ゼミは前年度の継続。大学院は唐宋時代語法の研究と文化比較研究として言語文化圏と文字文化圏を考察。

5 月　日本言語学会（於東京外大）に出席する。

8 月　家族で立山登山旅行をする。

9 月　シルクロード研究会訪中団に参加する。上海→西安→蘭州→酒泉→嘉峪関→敦煌→蘭州→炳霊寺→西安→上海・蘇州と廻る。

10 月　朝鮮学会（於天理図書館）で、「日朝両国漢文訓読探源」と題して講演する。

10 月　日本言語学会委員会（於京大会館）に出席する。

11 月　家族で大山登山旅行をする。

11 月　「水門の会」例会で、「日本における漢文訓読と郷札・口訣・吏読について」と題して話をする。

1981（昭和 56）年

4 月　昭和 56 年度講義：2 年講読は中国語学概説と方孝岳『漢語語音史概略』。3 年講読は銭彩等『説岳全伝』。中国文学特殊講義は周篤文『宋詞』、朱祖謀『宋詞三百首』をテキストに宋詞研究を講義。長田ゼミは明代の短編白話小説集「三言二拍」の研究。大学院は『古今韻会挙要』の研究と文化比較研究として言語文化圏と文字文化圏を考察。

5 月　日本モンゴル学会に出席する。

1982（昭和 57）年

4 月　神戸市外国語大学外国学研究所所長を兼任する。

8 月　毛沢東思想学院創立 15 周年活動協力の呼びかけ人となる。

8 月　日中人文社会科学交流協会第 3 回学術交流訪中団（内蒙古旅行）に参加する。北京→フフホト→ウラントクと廻る。内蒙古大学でチンゲルタイ（清格爾泰）氏と会う。ウラントクでは蒙古服を着てパオに泊まる。

11 月　中国語学会（於大阪外大）に出席する。

1983（昭和 58）年

4 月　昭和 58 年度講義：2 年講読は中国語学概説と胡裕樹主編『現代漢語・増訂本』。3 年講読は呉璿『飛龍全伝』。中国文学特殊講義は史存直『漢語語音史綱要』、趙誠『中国古代韻書』をテキストに漢語音韻を講義。長田ゼミは晩清小説の語学的文学的研究。大学院は王力『中国語言学史』をテキストに音韻研究。

10 月　神戸外大市民講座で、「胡漢複合文化論序説」と題して講演する。

1984（昭和 59）年

2 月　関西長安会（華北交通の同窓会）に出席する。

3 月　白内障の手術のため神戸市立中央市民病院に入院する。

4 月　昭和 59 年度講義：2 年講読は張静主編『新編現代漢語』。3 年生講読は『残唐五代史演義伝』・中国文学特殊講義は「宋詞」。長田ゼミは阿英『晩清小説史』により各自一作家を選んで輪講。大学院では楊耐思『中原音韻音系』をテキストに、中国近世音韻史研究と文化比較研究として、「シルク・ロードの文字言語」を講義。

7 月　家族で木曽御嶽山登山旅行をする。

10 月　日本中国学会（於大東文化大学）に出席する。

10 月　中国語学会（於神戸大学）に出席する。

1985（昭和 60）年

3 月　「科学万博―つくば’85」の松下館に展示された弥生人ロボットが話す弥生語を復元する。弥生語豆字典も作成する。

4 月　昭和 60 年度講義：2 年講読。3 年講読。長田ゼミは昨年度の継続。大学院は『韻鏡指要録・翻切伐椅篇』をテキストに日本漢字音を考察。

6 月 11 日　毎日放送の「ごめんやす馬場章夫です」に出演し、弥生語について話す。

6 月　「水門の会」例会で、「ロボットに喋らせた弥生語」と題して話をする。

8 月　妻の兄嫁（親友神宮寿の妻）と孫のさやかも一緒に、東北家族旅行。須川温泉で保養後、平泉を見学する。

10 月　大阪外国語大学大学院兼任講師（言語学特殊講義担当）となる（1989 年まで）。集中講義（言語学特殊研究 III）「ツングース諸語」を講義する。

10 月　大中遺跡の地に開館した播磨町郷土資料館の弥生語を復元する。

1986（昭和 61）年

3 月　神戸市外国語大学を退職する。

6 月　日中文化史研究交流会で、『杜家立成雑書要略』の輪読を始める。毎月 1～2 回土曜日の午後に開く。

7 月　大阪外大大学院で集中講義（言語学特殊研究 III）「ツングース諸語」を講義する。

9 月　張家口友好訪中の旅。北京→包頭→フフホト→大同→張家口→北京と廻る。大境門、旧日本領事館、張家口駅と思い出多い場所を再訪する。

10 月　朝鮮学会（於天理大学）に出席する。

10 月　母章死去する。享年 96 歳。

10 月　中国語学会に出席する。

1987（昭和 62）

1 月　読売新聞土曜版の「ヨミウリ・チルドレンズ・エクスプレス」に「弥生時代の日本語」を掲載するということで、子供記者と一緒に播磨町郷土資料館に出向いて説明する。また、弥生語の復元も依頼される。

2 月　福岡市板付遺跡の学芸員力武卓治氏から弥生語の復元を依頼される。

4 月　神田外語大学教授となり、中国学科 1 年 B 組の担任をする。毎週水曜日に上京。幕張にある神田外語大に行き、大学の宿泊施設に 2 泊。木（午前中 4 時間）・金（午前中 4 時間と午後 2 時間）と授業を行い、金曜日に帰宅する生活を 4 年間続ける。中国語の初歩を孫のような学生に手取り足取り教えるのは、楽しかったようである。また、水・木曜日の夜は、同宿の英語科鶴谷壽氏たちと小宴会に興じている。

8 月　家族で信州旅行。蓮華温泉・小谷温泉で保養する。

9 月　大阪外大大学院で集中講義（言語学特殊研究 III）「ツングース諸語」を講義する。

9 月　韓国東国大学校日本学研究所の第 9 回国際学術講演会において、「日韓両語の比較研究上の問題点」と題して講演を行う。

10 月　朝鮮学会（於天理大学）に出席する。

10 月　府立二中三五会に出席する。

1988（昭和 63）年

2 月　関西長安会（於梅田太湖）に出席する。

4 月　神田外語大中国学科 2 年 A 組の担任になる。前年に継続して、中国語の会話・読会・作文力の養成。中国語史として、上古漢音から近代漢語までの中国語音韻の変遷を講義。

5 月　日本モンゴル学会（於慶応大学）に出席する。

10 月　日本言語学会（於神戸外大）に出席する。

10 月　中国語学会（於神戸外大）に出席する。

10 月　大阪外大大学院で集中講義（言語学特殊研究 III）「ツングース諸語」を講義する。

1989（平成元）年

4 月　神田外語大中国学科 2 年 B 組の担任となる。2 年の中国語と中国語音韻論・中国語学特殊研究として魯迅『吶喊』の購読・中国古典講読として司馬遷の『史記』を講読。

5 月　関西長安会（於大阪東天紅）に出席する。

6 月　播磨町郷土資料館の歴史講座で、「風土記に見える渡来系氏族とその祭神」と題して講演する。

7 月　クリルタイ（於野尻湖ホテル）に参加する。

8 月　家族で木曽旅行をする。妻の祖父神宮高壽の霊人碑に参る。

10 月　中国語学会（於東京外語大）に出席する。

12 月　家族で九州旅行をする。岩戸山古墳・吉野ヶ里遺跡を見学する。

1990（平成 2）年

3 月　家族で瀬戸内旅行をする。尾道・大三島の大山祇神社を見学する。

4 月　神田外語大中国学科 4 年 B 組の担任となる。中国語語学力の総仕上げと中国語史・中国古典講読として「六朝志怪小説」の講読。

7 月　古稀の祝いをする。

8 月　家族で信州旅行をする。上高地の徳本峠に登る。

10 月　日本中国語学会（於京都産業大学）に出席する。

12 月　「水門の会」例会で、「匈奴の称号単于―上古漢語音韻とその借音表記について」と題して話をする。

12 月　家族で四国旅行をする。母方の本貫の地高知を訪ねる。

1991（平成 3）年

1 月　神田外語大で最終講義を行う。

1 月　長兄寅彦死去する。享年 77 歳。

3 月　神田外語大の卒業式に出席する。

3 月　神田外語大学を退職する。

4 月　白内障のため神戸市立中央市民病院に入院する。

5 月　日中合同契丹文字国際シンポジウム（於アピカルイン京都）で、「契丹漢字音探源―契丹小字によって表記された漢字音の音価とその体系について」と題して研究発表する。

8 月　家族で東北旅行。蔵王登山、多賀城、松島を廻る。

11 月　東方学会（於中央大学）に出席する。

11 月　日本モンゴル学会（於京都府立大学）に出席する。

12 月　日本語源研究会（於姫路獨協大）に出席する。

12 月　家族で四国旅行。道後温泉で保養後、琴平神宮に参拝する。

1992（平成 4）年

2 月　神戸外大中国学科 3 回生と一緒に富山宇奈月温泉に泊まる。その後、富山大学人文学部で、言語学特殊講義（モンゴル語学）の集中講義を行う。富山大の浅井亨氏の案内で富山観光。

3 月　一八会に出席する。

6 月　東京外大の同窓会に出席する。

7 月　「水門の会」例会で、「西夏語訳類林瑣説―敦煌出土の類書、琱玉集・蒙求との関連において」と題して話をする。

9 月　長兄寅彦の埋葬式に出席する。

10 月　次兄夫妻・妻と一緒に弟岩雄の墓参りに奥多摩に行く。

11 月　長安会九州大会に出席する。

11 月　楠友会（神戸外大退職職員の会）に出席する。

11 月　日本モンゴル学会（於大阪外語大）に出席する。

1993（平成 5）年

4 月　「水門の会」例会で、「『杜家立成』の撰者について」と題して話をする。

5 月　日中文化交流史研究会で、『正倉院本王勃詩序』の輪読を始める。

7 月　長男の住む長崎に家族旅行する。

8 月　内蒙古自治区赤峰市で行われた中国北方古代文化国際学術研討会に参加し、慶陵を見学する。また「契丹文字、女真文字および西夏文字の関連性についての一考察―成吉思皇帝聖旨牌裏面の番字を足掛かりとして」と題して研究発表する。

11 月　楠友会に出席する。

1994（平成 6）年

4 月　勲三等旭日中綬章が授与される。

5 月　勲章伝達式に妻とともに出席する。

5 月　神戸外大中国学科 3 回生の同期会で、松山道後温泉・広島に行く。

7 月　次兄武之夫妻と甥の正彦、妻・娘と一緒に長野県上伊那郡辰野町にある本家の墓参りに行く。帰りに乗鞍岳に登る。

11 月　楠友会に出席する。

1995（平成 7）年

1 月　阪神大震災に遭遇する。本は全て棚から落ち、水道は 10 日、ガスは 2 ヶ月間止まる。以後、書斎は使用せず、居間に資料を並べて研究する。

2 月　ガスが止まったままなので、塩田温泉に家族で行く。

5 月　梅棹忠夫氏の文化勲章綬章祝賀会に出席する。

9 月　「水門の会」例会で、「『類林』の成立について」と題して話をする。

12 月　家族で九州旅行。西都原古墳群・宇佐八幡宮・国東半島をめぐる。

1996（平成 8）年

2 月　妻と一緒に上京し、一八会とやまびこ会（神宮兄妹の所属していた登山会でかつて一緒に山行）に出席する。

3 月　次兄武之の傘寿を祝う会に出席する。

6 月　妻と一緒に、共通の友人である松橋正文氏（やまびこ会会員）の八ヶ岳山麓の自宅を訪問する。

8 月　次男俊樹の赴任先メルボルン（オーストラリア）を訪問する。

11 月　「言語接触と言語構造」第 3 回研究会（於京都産業大学）で、「西夏語と元代中国語」と題して講演する。

11 月　楠友会に出席する。

1997（平成 9）年

4 月　叔母長田千代子の葬儀に出席するため、次兄武之夫妻と豊橋に行く。

5 月　朝日カルチャーセンター芦屋教室特別公開講座で、「記紀と古代日本語―日本語の起源」と題して講演する。

6 月　喜寿の祝をする。

8 月　家族で東北旅行に行く。三内丸山遺跡を見学し、八甲田山・奥入瀬渓谷・十和田湖をめぐる。亡くなる少し前、「生涯で一番楽しかった」と述懐した旅行。

10 月　白内障の再手術（眼内レンズ）のため神戸市立中央市民病院に入院する。

1998（平成 10）年

4 月　「水門の会」例会で、「漢武帝内伝の成立と道家」と題して話をする。

8 月　家族で伊勢旅行をする。伊勢神宮・本居宣長旧居をめぐる。

10 月　神戸外大中国学科 3 回生の同期会に出席する。

11 月　ひふみ会（神戸外専と神戸外大 1･2･3 回生で結成）に出席する。

1999（平成 11）年

10 月　妻と一緒に妻の継母の埋葬式に参列する。

10 月　神戸外大中国学科 3 回生の同期会で、山中温泉に行く。

11 月　神戸外大中国学科同学会に出席する。

2000（平成 12）年

1 月　この頃から、足の衰えが目立ち、王勃輪読会と近くの医院への診察のほかは外出しなくなる。自宅の居間で、論述集の準備に没頭する毎日。

6 月　楠友会に出席する。

7 月　『長田夏樹論述集』の出版記念会をする。

8 月　家族で岡山の湯郷温泉に保養に行く。

2001（平成 13）年

1 月　妻マリの傘寿の祝いをする。

3 月　家族で淡路洲本温泉に保養に行く。

4 月　足が衰え、疲れやすくなったこともあり、王勃輪読会にも出かけなくなる。

10 月　神戸外大中国学科 3 回生同期会に出席する。

12 月　家族で淡路洲本温泉に保養に行く。

2002（平成 14）年

1 月　舞子ビラで妻の誕生日を祝う。

2 月　この頃から、西夏語を再発見した中国考証学者は誰かという命題で、盛んに明清文人の随筆集に当たる。

2003（平成 15）年

1 月　シーパル須磨で妻の誕生日を祝う。

7 月　次兄武之死去する。享年 87 歳。

8 月　家族で武田尾温泉に保養に行く。

10 月　家族で東京旅行し、妻の実家の墓参りをする。

2004（平成 16）年

8 月 8 日　妻マリ死去する。享年 83 歳。

9 月　『朝鮮学報』に載せる論文執筆のため碑文の写真に取り組むが、視野に欠損を感じる。眼科医院に行くと、緑内障と診断される。

2005（平成 18）年

8 月　妻の一周忌。シーパル須磨で、長男一家、次男一家、娘と会食する。

11 月　妻を鵜越墓園に埋葬する。

2006（平成 17）年

3 月　長女礼子が教職を辞し、介護に専念することになる。自力歩行が困難なため、自動車か車椅子での移動を余儀なくされる。

7 月　妻の三回忌の法要を営む。

2007（平成 19）年

5 月　遠藤光暁氏、太田斎氏、橋本貴子氏がインタビューに来訪する。

2008（平成 20）年

9 月　米寿の祝いをする。

2009（平成 21）年

1 月　最後の新年宴会。

2 月　学生社から連絡があり、『邪馬台国の言語』の書き直しを始める。上古漢音体系執筆のため、最後の力を振り絞る。

7 月　脱水症状による体調不良のため、救急車で神戸徳洲会病院に運ばれる。

9 月　自力での入浴が困難となり、介護保険の適用でヘルパーさんに週 2 回入浴介護についてもらう。

12 月　腹痛を訴えて、寝こむ。

2010（平成 22）年

1 月　神戸徳洲会病院に入院する。

1 月 12 日　死去する。享年 89 歳。戒名は「光樹院賢覚貫道居士」。

3 月 29 日　鵜越墓園に埋葬する。

9 月　最後の著書となった『新稿邪馬台国の言語』が出版される。